

とちろローカルサミット G8セッション

テーマ「持続可能な地域と金融」

●メンバー

- ・吉沢保幸（モデレーター）

場所文化フォーラム代表幹事、ぴあ（株）顧問、税理士、「とちろの…」大店長

<略歴>

- ◆1955年新潟県上越市生れ。1978年東大法卒、その後日本銀行勤務を経て、2001年2月からぴあ（株）。
- ◆企業経営や税理士業務に関わる一方で、場所文化フォーラムやものづくり生命文明機構を中心に、これまでの金融経験等を活かしながら、地域活性化のための新たな「志あるビジネス・金融モデル」や「ローカルファイナンス論」の構築を図ると共に、「とちろの…」を交流拠点にした全国の地域活性化活動の連携等に注力している。

- ・内山 節（キックオフ・スピーカー）

哲学者

立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科教授

NPO 法人「森づくりフォーラム」代表理事

<略歴>

- ◆1950年東京都世田谷区生まれ
- ◆1970年頃から、東京と群馬県の山村、上野村との二重生活をしている

【最近の著書等】

- ◆『〈創造的である〉ということ』上・下（農文協 2006年）
- ◆『戦争という仕事』（信濃毎日新聞社 2006年）
- ◆『日本人はなぜキツネにだまされなくなったのか』（講談社現代新書 2007年）他

- ・中井徳太郎

人事院給与局給与第二課長

<略歴>

- ◆1962年（昭和37年）生まれ。東京大学法学部卒業。85年大蔵省入省。
- ◆イギリス大使館1等書記官、主計局主査（農林水産係）などを経験し、99年から2002年まで富山県に出向。生活環境部長などを勤め、いわゆる「逆さ地図」をモチーフとする日本海学の確立・普及に携わる。02年財務省広報室長。04年から06年まで東京大学へ出向し、医科学研究所教授。06年金融庁監督局協同組織金融室長。07年7月に現職に就任し現在に至る。

・坂本忠弘

地域共創ネットワーク株式会社 代表取締役

<略歴>

- ◆昭和41年奈良県生まれ。平成2年に大蔵省入省。財務省主計局、金融庁監督局等を経て、退官後、地域金融機関の新たな融資・投資のソリューションの提供、地域資源を活かしたユニークな事業活動の支援等を行う会社を設立。また、シンクタンク構想日本の政策担当ディレクター。

・宮成雄大

愛媛銀行従業員組合執行委員長

NPO法人ループ88四国理事長

<略歴>

- ◆昭和47年『四国最西端の町』愛媛県伊方町(旧三崎町)生まれ。平成6年に(株)愛媛銀行に入行。本店営業部、今治支店勤務を経て、平成15年より愛媛銀行従業員組合専従者。平成17年8月執行委員長。平成20年3月四国88カ所お遍路文化を世界に発信することを目的に、四国四県の第二地銀4行の従業員組合を中心として、NPO法人ループ88四国を設立。初代理事長に就任。現在に至る。

・小森正伸

帯広信用金庫 経営企画部部長

<略歴>

- ◆昭和32年(1957年) 帯広市生まれ
- ◆昭和54年(1979年) 東京都立大学卒業
- ◆ 同年 帯広信用金庫 入庫(本店勤務)
- ◆平成11年(1999年) 総合企画部 企画調査課長
- ◆平成15年(2003年) せいなん支店長
- ◆平成18年(2006年) 経営企画部 副部長
- ◆平成20年(2008年) 現職

・豊田浩司

農林漁業金融公庫 帯広拠点長

<略歴>

- ◆昭和35年東京都生まれ。
- ◆昭和57年農林公庫入庫。本店(農林水産省出向含む)勤務10年、支店勤務16年。支店は福岡支店を振り出しに東海(名古屋)、近畿(京都)、関東(さいたま)の各支店で融資業務を担当。特に農業生産者と結びついた食品産業向け融資に関する経験が豊富。政府系4金融

機関の組織統合(本年10月)による支店網再編成に伴い、農林公庫はこれまで支店のなかった帯広に職員を常駐させることになり、統合より1年前倒した昨年10月に帯広拠点を開設。現在、職員数10人で営業中。

・川崎哲史

日本政策投資銀行 業務企画部 調査役

<略歴>

- ◆昭和 47 年生まれ。一橋大学法学部卒。
- ◆平成 9 年 日本開発銀行(現日本政策投資銀行) 入行し、平成 11 年に、東北支店赴任。平成 13 年国土交通省出向(総合政策局政策課)。平成 17 年地域企画部 調査役、平成 19 年公共ソリューション部調査役に着任。平成 20 年現職に至る。

・井上理

帯広商工会議所青年部

公認会計士

<略歴>

- ◆昭和 45 年幕別町生 慶應義塾大学卒業
- ◆監査法人トーマツにて、株式公開業務、監査業務に従事
- ◆平成 16 年 事務所開業現在に至る。
- ◆帯広商工会議所商工調停士
- ◆北海道中小企業再生支援マネージャー

テーマ:「持続可能な地域と金融」

セッションキーワード

- ◆カジノ化する経済、グローバルマネーの暴走が、我々の生活・いのちを脅かしている
- ◆無事で安全な暮らしをまわす金融の在り方を問い直す必要
- ◆今の金融の在り方をどう組み直し、更に新しいお金の在り方を問うか
- ◆従来の間接金融・直接金融の在り方を問い直し、特に協同組織金融の原点に立ち戻る必要があるのではないか
- ◆都市と農山村を含む地域では、十分な地域循環ができていない
- ◆地域の貯蓄が地域で生かされていない(預貸率の低迷)

志民による具体的アクションプログラム

- ◆お金は人と人をつなぐ単なる道具であり、それに振り回されることなく、金融は信頼と相互扶助であるという原点に立ち戻る
- ⇒貨幣愛に翻弄されない社会の価値観への転換を図る

- ◆貨幣価値絶対主義を崩し、貨幣価値に換算されない価値の大切さを生む新たなマネーフロー、金融の仕組みを構築する  
⇒志民ファンドや農業ファンド等による都市・地域の志金の自然資源等への貯留とお金ではない形でのリターンを組み込んだ「志金循環」を、地域金融機関の創意工夫も得て実現する
- ◆更に減価するコミュニティー通貨や現代版講・無尽等の補完的金融の仕組みを創りあげ、無事で安心な生活を担保出来るようにする  
⇒地域間の連携によるコミュニティー通貨のネットワーク化も具体化し、補完的金融を漸次拡大させて行く

とちろローカルサミット G8セッション

テーマ「持続可能な地域と経済」

●メンバー

・(M) 浅野大介

経済産業省商務流通グループ

流通政策課物流政策室 課長補佐

<略歴>

- ◆1974年日本橋生まれ。
- ◆東京大学大学院 法学政治学研究科修了後、経済産業省入省。
- ◆経済産業政策局にて企業秘密への産業スパイ行為の取締法制の立案、資源エネルギー庁にて石油対策予算の総括業務や本邦周辺ガス田開発に向けた海洋探査の推進、地域経済産業グループにてものづくり系中小企業・コミュニティ産業の振興、内閣府にて政府経済見通しの策定および経済対策のとりまとめに従事。
- ◆2008年6月より流通政策課にて、我が国における航空・港湾・貿易手続等の改革、日本の商材・コンテンツの国際展開に向けたアジア電子流通圏構想の推進、通商交渉等を担当。

・(K) 谷口正次

資源・環境ジャーナリスト(講演・執筆活動) 国際連合大学ゼロエミッション・フォーラム・産業界ネットワーク代表理事。

<略歴>

- ◆1938年東京都生まれ。1960年九州工業大学鉱山工学科卒業、同年、小野田セメント(株)入社。1987年資源事業部長に就任、各種鉱物資源関係事業を手がける。1993年常務取締役役に就任、環境事業を立ち上げる。1996年秩父小野田(株)専務取締役、1998年太平洋セメント(株)専務取締役(研究開発・資源事業担当・環境事業管掌)、2002年屋久島電工株式会社代表取締役社長に就任。

【最近の著書等】

- ◆『メタル・ウォーズ』(東洋経済新報 2008年2月)他

・木内孝

NPO フューチャー500 理事長

<略歴>

- ◆「畏敬」と「矜持」(誇り)を喪ったこの国で生きるということ・・・を最近一冊の著書に纏めた儉約・健康・謙虚の「三ケン」で生きる男。
- ◆企業の代表、NPO法人の運営、企業体験から語る。

・安藤保彦

高知市副市長

<略歴>

- ◆昭和 39 年生まれ。神奈川県横浜市出身。
- ◆昭和 63 年4月通商産業省(現、経済産業省) 入省。大臣官房秘書課係長、英国短期留学、新規産業室長補佐、立地環境整備課長補佐などを経て、平成 19 年7月から高知市産業振興担当理事として転出。平成 20 年4月から現職に就任。現在、高知から日本を元気にするために日々奮闘中。地元横浜では、少年サッカーチームの監督を務めていた

・原田博夫

専修大学経済学部教授

<略歴>

- ◆昭和 23 年茨城県生まれ。
- ◆慶應義塾大学経済学部卒業・大学院博士課程修了後、現職。
- ◆専門は地方財政論で、茨城県、東京都狛江市、川崎市などで各種の審議会委員などを歴任。米国のスタンフォード大学、ジョージメイソン大学、英国ロンドンの LSE、IEA などで、客員研究員。

【最近の著作等】

- ◆原田博夫編『人と時代と経済学』専修大学出版局(2005 年)など

・宍倉秀明

株式会社戸田家 業務副支配人

<略歴>

- ◆1960 年 千葉県佐倉市出身。
- ◆1978 年 戸田家に入社。館内設備全般の管理を行ない 1992 年から生ごみ処理等の環境問題等も担当し、1998 年 ISO14001 推進委員会発足から事務局及び環境管理委員長を務め、現在環境管理責任者。
- ◆県内外・国外からの視察・研修等の対応をしている。

・安藤晴彦

経済産業省 産業技術環境局 リサイクル推進課長

電気通信大学客員教授

<略歴>

- ◆1985 東京大学法学部 第二類(公法)卒業
- ◆1985 通商産業省入省
- ◆2001 独立行政法人 経済産業研究所総括マネージャー

- ◆2001 内閣府企画官(経済財政一運営総括)  
独立行政法人 経済産業研究所フェロー(兼務)
  - ◆2003 資源エネルギー庁企画官(国際戦略・燃料電池担当)
  - ◆2004 同庁 燃料電池推進室長(兼務)  
電気通信大学客員教授(兼務・現職)
  - ◆2005 同庁 新エネルギー対策課長(兼務)
- その他
- ◆スペイン国イサベル女王勲章オフィシャル十字章受章

・早川隆司

帯広商工会議所青年部  
三井住友海上火災保険㈱

<略歴>

- ◆43年5月 愛知県生まれ
- ◆慶應義塾大学商学部卒業
- ◆三井海上入社。奈良支店・名古屋・東京東支店等を経て、現在、帯広支社課長。

テーマ:「持続可能な地域と経済」

セッションキーワード

- ◆経済社会におけるあらゆる「断絶」
- ◆農山村社会と都市社会(川上と川下)
- ◆資源産出国と先進国(南北問題も同じく川上川下)
- ◆川下側消費社会側の「想像力」の欠如
- ◆企業や個人レベルの「社会的責任」意識の希薄さ
- ◆全員参加型社会になっていない未成熟さ
- ◆企業トップの社会的責任意識の欠如、市民レベルの意識の欠如
- ◆川下の消費者の「利便性」と「低価格指向」に引っ張られすぎている構造
- ◆「コスト+適正利潤」の値決めの呪縛(プライシングの方法の誤り)
- ◆都市型生活の尺度で全国各地の経済状況を計測するという誤り
- ◆統計その他、都市型生活を基準とする尺度で農山村社会など地方経済を図ることによる「画一化」への道

志民による具体的アクションプログラム

- ◆お金は人と人をつなぐ単なる道具であり、それに振り回されることなく、金融は信頼と相互扶助であるという原点に立ち戻る  
⇒貨幣愛に翻弄されない社会の価値観への転換を図る

- ◆貨幣価値絶対主義を崩し、貨幣価値に換算されない価値の大切さを生む新たなマネーフロー、金融の仕組みを構築する
  - ⇒志民ファンドや農業ファンド等による都市・地域の志金の自然資源等への貯留とお金ではない形でのリターンを組み込んだ「志金循環」を、地域金融機関の創意工夫も得て実現する
- ◆更に減価するコミュニティー通貨や現代版講・無尽等の補完的金融の仕組みを創りあげ、無事で安心な生活を担保出来るようにする
  - ⇒地域間の連携によるコミュニティー通貨のネットワーク化も具体化し、補完的金融を漸次拡大させて行く



とちろローカルサミット G8セッション  
テーマ「持続可能な地域とまちづくり」

●メンバー

・(M) 手塚伸

山梨県商工労働部商工総務課総括課長補佐

山梨学院大学ローカルガバナンス研究センター客員研究員

国民森林会議常任幹事 多摩源流研究所幹事

<略歴>

- ◆山梨県生まれの48歳。
- ◆1982年山梨県庁入庁。農政、福祉、教育などの現場を経た後、90年から1年間の銀行派遣を含め、県の地域政策形成部門を中心に勤務。01年から(財)山梨総合研究所主任研究員を経て、03年、山梨県政策秘書室。07年4月から現職
- ◆「政策形成・評価と新しい課題への対応」((社)日本経営協会 共著)

・(K) 藻谷浩介

日本政策投資銀行 地域振興部 参事役

NPO 法人 ComPus地域経営支援ネットワーク 理事長

<略歴>

- ◆山口県生まれの44歳。平成合併前の3,200市町村の99.9%、海外53ヶ国を私費で訪問し、地域特性や郷土史を詳細に把握。地域活性化や人口成熟問題、観光振興などに関し、全国で年間400回以上の登壇をこなしている。政府関係の委員、諸大学の臨時講師多数。内閣府地域再生本部「地域活性化伝道師」。中小企業庁「中小企業サポーター」。
- ◆日本経済新聞出版社より、「実測！ ニッポンの地域力」を刊行(現在5刷)。

・岸本吉夫

経済産業省中小企業庁

経営支援課長

<略歴>

- ◆昭和37年神戸市生まれ。
- ◆昭和60年に通商産業省に入省。
- ◆平成11年中小企業庁にて中小企業基本法の改正に携わる。
- ◆平成15年経済産業省環境経済室長として地球温暖化問題を担当。警察庁組織犯罪対策部への出向を経て、平成19年8月から現職。

・谷昌幸

帯広畜産大学地域環境学研究部門 准教授

<略歴>

- ◆昭和43年1月25日生 40才 大阪府出身
- ◆平成15年10月 帯広畜産大学畜産学部助教授昇任現職
- ◆国立大学法人帯広畜産大学 地域環境学研究部門 准教授
- ◆ 専門分野 土壌化学、農畜産環境保全学
- ◆最近では、土壌や肥料に係る教育や研究だけではなく、農業生産現場と市民を結ぶ情報交換や情報共有の場を提供する「十勝農業イノベーションフォーラム」を設立し、生産現場で農と土を語る「アースカフェ」を開催するなどの活動も行っています。

・傘木宏夫

NPO 地域づくり工房 代表理事

<略歴>

- ◆東京都出身大阪教育大学在学中の国際連帯活動がきっかけで、南米チリに渡る。
- ◆帰国後、四大大気汚染訴訟の一つ「西淀川公害訴訟」の支援活動に参画。若い金の一部を原資に設立された公害地域再生センター(あおぞら財団)の研究主任に就任。
- ◆2002年に「NPO 地域づくり工房」設立。
- ◆ミニ水力発電や、菜種オイル生産・バイオ軽油製造のプロジェクトを実施するなど、市民の手で地域資源を掘り起こし、仕事を興すプロジェクトに取り組んでいる。

・木野村英明

木野村英明法律事務所 代表

弁護士

<略歴>

- ◆帯広商工会議所青年部 研修連携委員会
- ◆立教大学卒。地域、若手弁護士の一人。ファイナンシャルプランナー資格(CFP)も保有し、経済にもあかるい。

・三宅曜子

(株)クリエイティブ・ワイズ (株)マーケティング・ナビ 代表取締役社長

マーケティングコンサルタント、ライフコーディネーター

<略歴>

- ◆大学卒業後、衣・食・住全般のライフコーディネーター、及びスタイリストとして企業の販売促進プロデュース、広告制作、イベント関連プロデュース等を行う。その後、マーケティングコンサルタントとして、中小企業支援及び指導、商業活性化事業、まちづくり事業等、顧客

のニーズを的確に捉えた市場開発とアプローチ手法等、幅広い分野におけるマーケティング全般のアドバイスを全国各地で手がける。

- ◆又、19年度、経済産業省中小企業地域資源活用事業プログラムの政策審議会委員、国会での中小企業法案(中小企業地域資源活用促進法案)審議の参考人として立つなど、地域資源活用事業促進のハンズオン支援を積極的に行う。

・高安和夫

NPO法人銀座ミツバチプロジェクト 理事長

農業生産法人有限会社アグリクリエイト 取締役東京支社長

<略歴>

- ◆1965(昭和40)年、千葉県生まれ。
- ◆ナショナル住宅千葉パナホーム株式会社を経て、99年、農業生産法人(有)アグリクリエイトへ入社。
- ◆03年8月、取締役東京支社長就任。現在に至る。
- ◆04年10月、「銀座食学塾」を設立、代表世話人に就任。
- ◆08年7月第19回シンポジウム「米消費の新潮流」開催。05年4月、「銀座食学塾米作り隊」結成。
- ◆06年3月、「銀座ミツバチプロジェクト」を田中淳夫氏と共同で立ち上げる。
- ◆07年2月NPO法人銀座ミツバチプロジェクト理事長に就任。
- ◆08年5月、ファーム・エイド銀座2008開催、実行委員長として今後7月から1月は農業分野のクリエイターとして、環境を意識し食と農を大切にするライフスタイルの創造に挑戦中。

・田中淳夫

NPO法人 銀座ミツバチプロジェクト 副理事長

銀座の街研究会 代表世話人

(株)紙パルプ会館 常務取締役

<略歴>

- ◆1957年東京生まれ。
- ◆2006年春から、銀座の周辺で働く有志たちが集まり、ビルの屋上45Mの場所でミツバチを飼うプロジェクトがスタート。ミツバチの飼育を通して、都市と自然環境との共生を目指すプロジェクト。採れた蜂蜜は、銀座の技としてバーやスイーツ店、デパートなどで次々に商品となり季節の話題となっている。

モデレーターからの航路提示

- ◆「まちづくり」とは何か

- ◆多分、発端は、「名古屋栄東戦後復興土地画生地事業」における三輪田さんの発言
- ◆「街づくり」から「町づくり」、その間「地域づくり」「まちおこし」「むらづくり」などの派生用語
- ◆まち、地域と何か→イメージできる広がりです！
- ◆收拾がつかない状況
- ◆一体、まちづくりは何処へいくのか

キーマン登場：藻谷氏。キー1＝縮小文明

- ◆日本人が人口的に増え続けてきた時代の「まちづくり」が依然跋扈
- ◆地方では平均的に15年前に人口は減ったと実感
- ◆東京でも7年前から実感しているはず。
- ◆平均的に、15年前から日本は縮小へ
- ◆今、求められるのは、縮小時代に対応したまちづくりの考え方

キー2：市場経済に任せていいのか？

- ◆縮小文明と言われる時代に、私たちは、市場経済に身を委ねる、という選択肢を採用した。(させられた。)
- ◆選択と集中
- ◆経済、政治の単線化
- ◆しかし、市場のいうとおりにやってきたことが間違いだったのでは？
- ◆誰が主人公なのか？  
現状認識・アクションプログラム→その1
- ◆地域の潜在的な力が十分に表に出ていない。
- ◆サイレントマジョリティの声が響かない。
- ◆潜在的な力、物言わぬ少数派の活動を当たり前のように生活の舞台に出していく作業が行われていない。
- 日本の都市(まち)は地方(むら)に支えられて成立してきた。この関係性を見直し再構築する。
- むらの側もすべての質を高めていかなければならない。作り出すものを、共同体の中で熟成していく試みが重要
- そのためにも、添え稼ぎ、遊び仕事、マイナーサブスタンスの価値の再評価をすべき

その2：地域からまち、まちから場所へ

- ◆現在、我々を覆っている課題は極めて明快。
- ◆ハイパー高齢化への対応、食糧問題への対応、環境問題、とえりわけ低酸素社会にどのように対応するか。
- 行うべきことも明快
- 場所を提供する(地域の良いものを包み込めるよう、少なくとも3年を見通して体験を重ねられ

るよう。)

### その3：潜在的な地域資源をあからさまに

- ◆まちづくりのために必要な「地域の経営資源」が見通せていない。
- ◆仮にそれを見通せたとしても、表現する方法がわかっていない。
- ◆良いものがあっても、見通せなければ「生き甲斐」が得られない。
- ◆キーワードは「生活の提案」
- 普通の人々、女性(お母さん)が普通の言葉で自己表現できる場をつくろう
- そして、その「ほとぼしり」を形(販路)にしていこう。
- 地域資源の顕在化こそが「まちづくり」成功のコンピタンス

### その4: 地域のDNAを継承する

- ◆それぞれの地域が、地域の歴史をDNAに刻み込まれたものとして継承していない。
- ◆1607年、朝鮮特使を迎えた際の家康の対応。そこから発生する銀座の価値。
- ◆単に、歴史の再評価ではなく、歴史を生活者の体内に刻み込み、そこから発想していこう。
- ◆全体の質を向上させることは最終ゴールであっても、とりあえず、出来る人が輝こう。

### その5: まちづくりにおける合意形成

- ◆地域の形態に応じて、合意形成の手法は様々にあるはず。あいまいな合意で(例えば多数決)決めてしまうことはあまりに危険。
- 直面する課題に応じて様々な合意形成手法を受け入れよう。
- 特に、法律家やコーディネーターを入れたリーガルマインドな合意形成手法の萌芽が見られており、こうしたやり方を上手に採用しよう。

### その6: 十勝へ

- ◆「豊かな食材」「豊穡な大地」「訪れる人へのホスピタリティ」は本物か。
- ◆十勝の人々が、現実に対峙する必要がある。
- ◆マスコミを巻き込み、真剣に現状を変えていく作業をする努力が必要。
- ◆これは十勝だけのもんだいではない。
- ◆最低3年、こつこつと正しい事実を積み上げよう。最初はロコミでも、それを志民運動論に。

### モデレーターの独断発言

- ◆「まちづくり」から「まち育て」へ
- ◆死民→市民→志民
- ◆いえ・みせ・まち・くに

とちろローカルサミット G8セッション

テーマ「持続可能な地域と環境」

●メンバー

・(M) 篠上雄彦

新日本製鐵株式會社

環境部環境リレーションズ グループマネジャー

<略歴>

- ◆早稲田大学政治経済学部政治学科卒
- ◆1980年新日本製鐵(株)入社。
- ◆釜石製鐵所、本社薄板販売部、名古屋製鐵所環境管理室部長代理等を経て、2001年から現職。
- ◆環境リレーションズの企画・推進、「環境・社会報告書」の編集長、技術移転による CDM プロジェクトの推進等を担当。
- ◆(社)日本鉄鋼連盟環境・エネルギー標準化委員会委員、環境法政策学会会員等。

・(K) 畠山重篤

「牡蠣の森を慕う会」代表

京都大学フィールド科学教育研究センター社会連携教授

<略歴>

- ◆1943年中国上海生まれ。高校卒業後、牡蠣、帆立の養殖に従事する。家業のかたわら「森は海の恋人」を合言葉に、気仙沼湾に注ぐ大川上流の室根山への植樹運動を続ける。

【主な著作等】

- ◆『日本<汽水>紀行』(文藝春秋/日本エッセイスト・クラブ賞)、『漁師さんの森づくり』(講談社 / 産経児童出版文化賞 JR 賞・小学館児童出版文化賞)、『森は海の恋人』『リアスの海辺から』(共に文春文庫)など

・森鐘一

モリ エコロジー株式会社 代表取締役、

博士(工学)

国際日本文化研究センター 共同研究員

<略歴>

- ◆昭和48年 新日本気象海洋(株)(現)いであ(株) 入社
- ◆昭和51年同社退社後、同年、(株)海洋生態研究所を設立し代表取締役に就任。
- ◆昭和61年(株)海洋生態研究所を退社し、昭和61年モリ エコロジー(株)設立し、代表取

締役に就任、現在に至る。

- ◆また、平成 17 年に国際日本文化研究センター共同研究員に着任し、現在に至る
- ◆富栄養化現象の現況報告及び解析と物理化学的環境が生物に及ぼす影響について調査、解析、環境アセスメント、環境に優しい工事計画などのコンサルタントを行っている。

・川上毅

環境省 廃棄物・リサイクル対策部

企画課 循環型社会推進室長

<略歴>

- ◆慶應義塾大学経済学部
- ◆平 元. 4 環境庁入庁
- ◆平 元. 4 // 大気保全局企画課
- ◆4. 4 // 水質保全局水質規制課主査
- ◆5. 7 // 企画調整局企画調整課計画調査室計画調査係長
- ◆8. 5 経済協力開発機構本部環境局(フランス)
- ◆10. 12 環境庁企画調整局企画調整課調査企画室室長補佐
- ◆11. 7 // 長官官房総務課課長補佐
- ◆12. 6 // 水質保全局企画課課長補佐
- ◆13. 1 環境省大臣官房廃棄物・リサイクル対策部企画課課長補佐
- ◆13. 7 // 大臣官房総務課国会連絡調整官
- ◆14. 7 滋賀県琵琶湖環境部自然保護課長
- ◆16. 7 経済協力開発機構本部環境局環境政策審査課管理官(フランス)

・延澤栄賢

真宗大谷派 宗務所 主事

<略歴>

- ◆宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌本部事務室(略称:御遠忌本部事務室)
- ◆真宗本廟両堂等御修復事務所(略称:御修復事務所)
- ◆東本願寺の御影堂修復工事や東本願寺と環境を考える市民プロジェクトの担当者

・工藤大輔

帯広商工会議所青年部 副会長

日新ハウス株式会社 代表取締役

NPO 法人コミュニティシンクタンクあうるず理事

<略歴>

- ◆1965 年 3 月 20 日生大分県別府市出身

- ◆日本大学商学部卒
- ◆建設コンサルタント会社に勤務後、日新ハウス株式会社入社
- ◆2000年 同社代表取締役就任 現在に至る
- ◆NPO法人コミュニティシンクタンク あうるず にて、さまざまな地域での活動と連携しながら、地域戦略、施策に関する提言・実行
- ◆活動例・エゾシカ皮を使ったバッグ(コムニブランド)の製作・音楽を通じたCO2削減運動(バイオマスライブ)など

・爲廣正彦

株式会社更別企業 代表取締役  
 株式会社エコERC 取締役専務  
 北海道バイオディーゼル研究会幹事  
 NPO法人十勝エネルギーネットワーク専務理事  
 更別村商工会理事  
 さらべつ村民フリートーク委員会座長

<略歴>

- ◆河西郡更別村出身、更別村在住
- ◆昭和35年1月28日生まれ
- ◆平成7年4月に山形県からUターンして、有限会社更別企業を設立。浄化槽設計施工のほか一般廃棄物処理を主たる業としている。BDFの精製については、平成12年から試験研究に着手し、平成18年2月から本格的に開始している。

・野中ともよ

NPO 法人ガイア・イニシアティブ代表

<略歴>

- ◆東京都出身。
- ◆上智大学大学院文学研究科前期博士課程終了。
- ◆1979年より、NHK、テレビ東京等で多数の番組メインキャスターを務める。日興フィナンシャル・インテリジェンス株式会社 理事長、アサヒビール株式会社取締役などを経て、2002年6月より三洋電機株式会社 取締役、2005年7月～2007年3月同社代表取締役会長。
- ◆2007年8月にNPO法人ガイア・イニシアティブを設立、代表を務める。また、現在は内閣府沖縄振興審議会委員、宇宙航空研究開発機構(JAXA)経営アドバイザーも兼務。

【著書等】

- ◆『心をつなぐ生き方』、『ガンバレ、自分！』『私たち「地球人」』ほか多数。



・鈴木梯介

(株)鈴廣蒲鉾本店 代表取締役副社長

鈴廣かまぼこ(株) 代表取締役副社長

(株)小田原鈴廣 代表取締役副社長

<略歴>

- ◆昭和56年 スズヒロUSA社長 (米国ロスアンゼルス)
- ◆昭和60年 JACクリエイティブフーズ社長(米国ロスアンゼルス)
- ◆平成 3年 鈴廣商事株式会社並びに
- ◆ 鈴廣蒲鉾工業株式会社常務取締役
- ◆を経て平成8年より現職に就任し、現在に至る。

テーマ：「持続可能な地域と環境」

セッションキーワード

- ◆海と森の重要性、海と川と森をつなぐ鉄分の重要性
- ◆脊梁山脈から2万1千本の河川、日本の周りは海の森 日本の森林面積70%、高知では80%⇒しかし金がない
- ◆食もエネルギーも原料も海外依存、フードマイレージ
- ◆食はいのちにかかわる、日本の魚は昔も今も海外依存、
- ◆化石燃料の枯渇は目前
- ◆資源を利用するだけの経済からの脱却
- ◆自然を支配・利用する人間中心主義の限界、西欧近代合理主義の限界
- ◆環境問題は人間の心の問題、e.g 海・湖・堀・川の汚れ
- ◆“人間と環境“、“中央と地方“等の二分法からの転換

住民による具体的なアクションプログラム

- ◆海と森の多様な価値の認識、沿岸を大切にする教育・森と川と海をつなぐ教育の取組み—「地域循環圏」構想
- ◆森里海連関学の普及、持続可能な漁業—e.g.定置網の見直し、水源の森づくり・郷土の森づくり・海の森づくりの拡大
- ◆「必要なものを必要なだけ必要な質で」資源投入、地域での循環・“地まかない“の拡大による経済性の自然な追求、e.g.なたね油利用のBDF・食料残渣利用の有機肥料、伝統的なもの見直し e.g.梅酢、我慢しないプラス思考
- ◆自然に対する考え方の転換
- ◆エコシステムの中に人間がいる、ガイア思想＝「生かされている自分」の認識、「いただきます」＝いのちへの感謝の思想、農業もエネルギーも水産業も「つながっている」ことを自覚する、他人や他地域と比較しない自分のものさしを大事にする、マネーゲームに利用されな

い心構え、海外の「志民」との連携、東アジアでの3Rの連携

◆【結論】「あほ;あつくほれ込むひと」の会の結成と連帯

あほになり、いのち見つめて、うん信じ、えんを大事に、おんもわすれず

とちろローカルサミット G8 セッション

テーマ「持続可能な地域と食」

●メンバー

・(M) 長野麻子

大臣官房情報課 企画官

<略歴>

- ◆1971年愛知県安城市(日本のデンマーク)生。愛知県立岡崎高校卒、
- ◆東京大学文学部フランス文学科卒業後、1994年 農林水産省入省
- ◆1999～2001年 フランス留学(パリ第1大学及び第5大学で修士号取得)
- ◆2002年に大臣官房企画評価課企画官(バイオマス・ニッポン総合戦略担当)、2003年国際部国際調整課課長補佐(FTA/EPA 担当)に着任
- ◆2005年消費・安全局動物衛生課課長補佐(鳥インフルエンザ、米国産牛肉輸入問題担当)に着任。
- ◆2006年～2008年(株)電通ソーシャル・ネットワーク室出向し、2008年4月から現職。

・(K) 村田泰夫

農林漁業金融公庫理事

明治大学農学部客員教授

財政制度等審議会委員

<略歴>

- ◆1945(昭和20)年、東京生まれ。
- ◆北大農学部農業経済学科卒業。1969年朝日新聞社に入社。経済部記者として財政、金融、農政問題などを担当。東京経済部次長などを経て、論説委員、編集委員として、経済政策のほか農政、環境問題を担当した。
- ◆2005年1月定年退職。同4月から農林漁業金融公庫理事として経営改革の道筋作りに取り組み。2005年3月の新しい「基本計画」の策定に食料・農業・農村政策審議会専門委員として参画。

・安井美沙子

東京財団政策研究部ディレクター兼研究員

<略歴>

- ◆上智大学法学部を経て、ニューヨーク大学ジャーナリズム学部卒業。マッキンゼー・アンド・カンパニー、ミスミに勤務後、マーケティング・コンサルタントとして独立、民間企業や地方自治体のコンサルティングにあたる。他に岩手県「食と農の研究会」委員、大阪市役所・市政

改革本部調査員、(財)日本都市センター「地域ブランド戦略研究会」委員等も務める。現在は東京財団政策研究部ディレクター兼研究員。

- ◆著書『ほんとうの「おいしい」を知っていますか?』(英治出版:2007年5月)、寄稿『新「地域」ブランド戦略』(日経広告研究所:2007年10月)等。

・田中宗浩

佐賀大学農学部 生物環境科学科 准教授

<略歴>

- ◆大学での研究成果は、実際の社会にフィードバックして実現することが大切だと思っています。
- ◆地域内(市町村レベルの小さな集合単位)を中心にして資源循環型の事業を展開することにより、様々なメリットを生み出すことができます。地域にメリットをもたらす循環技術を確立するには、地域の特性に適応した様々な社会技術を繋げ、同時に、人の「つながり」を生み出すことが大切だなあと感じています。
- ◆教育研究:施設園芸、農産物の流通や貯蔵技術、バイオマスの資源利用に関する研究開発に従事。
- ◆佐賀大学の産学官連携部門、地域貢献部門、知的財産管理部門も担当。

・福田俊明

NPO 法人伊万里はちがめプラン 理事長

<略歴>

- ◆生ごみを市民の税金で焼却処分するのは“もったいない”と気づいた市民や飲食店、旅館業の有志が「生ごみを宝に」と立ち上がったのが1992年、環境保全型啓発運動や微生物の培養実験などを経て2000年に生ごみ堆肥化実験プラントが完成、将来大型生ごみ堆肥化プラントの実現を想定し微生物による本格的な生ごみ堆肥化実証実験を開始する。
- ◆2003年NPO法人として認定を受ける。
- ◆生ごみの堆肥化、廃食油の燃料化、菜の花プロジェクト活動等の実践的体験を通して、小中高校生に対する環境学習、市民、行政、企業等に対して環境保全啓発(地球温暖化防止)運動を展開している。
- ◆各方面にこれまでの活動が認められ「元気大賞2002」「環境水俣賞」等数々の賞を頂き、2007年10月、食品リサイクル推進環境大賞の「奨励賞」を受賞。最近では「食と環境・エネルギー・伝統陶芸、文化の薫る伊万里の旅路プロジェクト」協議会を立ち上げ、環境と教育、観光が一体となったエコツーリズムの実現を目指している。

・宮嶋望

新得共働学舎 代表

<略歴>

- ◆'51年9月4日 前橋生まれ、東京育ち。
- ◆'74年3月 自由学園最高学部卒業、卒業論文は植物生態学で「森の植生遷移」。
- ◆'78年6月 ウィスコンシン大学(マディソン)の畜産学部(Dairy Science B.S.)を卒業。
- ◆'78年6月 北海道上川郡新得町に入植、共働学舎新得農場を開設。
- ◆'04年10月 第3回山のチーズオリンピック(スイス)で「さくら」が金賞。
- ◆'06年8月 NPO 共働学舎が設立。副理事長に就任
- ◆'07年5月 Monde Selection で「さくら」、「笹ゆき」が最高金賞を受賞
- ◆'07年10月 第5回山のチーズオリンピック(ドイツ)で「さくら」が金賞、  
◆ 「エメレット」が銀賞を受賞。国際貢献賞もあわせて受賞。
- ◆'08年4月 Monde Selection で「笹ゆき」金賞受賞、「ラクレット」銀賞受賞。

・川崎博史

帯広商工会議所青年部 副会長

㈱川崎米穀 常務取締役

<略歴>

- ◆帯広商工会議所きつてのイケメン副会長。
- ◆腕っぷしも強く、兄貴。
- ◆女性ファン、多数。
- ◆でも、お米にはうるさい。

・有賀雄二

勝沼醸造株式会社 代表取締役

<略歴>

- ◆1955年5月23日 山梨県甲州市勝沼町 生まれ。東京農業大学 醸造学科 卒。
- ◆山梨県ワイン酒造組合 副会長
- ◆社団法人 山梨法人会 勝沼支部長

・岡本良和

㈱岡本亀太郎本店 専務取締役

<略歴>

- ◆昭和43年広島県福山市生まれ。
- ◆平成4年フィントレイ大学(米国)卒業、同年合同酒精㈱に入社。基本的な醸造を経験後、営業マンとして東京～九州を経験。
- ◆平成12年家業継承の為、㈱岡本亀太郎本店に入社。温故知新の精神で伝統の「保命酒造り」に更に磨きをかけ、平成17・18年に相次いで保命酒仕込みの梅酒「梅太郎」・杏酒

「杏子姫」を発売。伝統酒に新たな息を吹き込む。

- ◆平成 19 年には同商品が国の認定する「地域資源活用新事業展開支援事業一号認定」に選ばれ、伝統文化・産業の継承に努める。

テーマ：「持続可能な地域と食」

セッションキーワード

- ◆「いのちと農」の循環の輪が壊れている。食料自給率39%という数字がその象徴。  
⇒国内の地域資源を十分、生かしきっていない。
- ◆国内農業の荒廃が進んでいる。かけがえのない(無限大の)多面的機能が損なわれている。  
⇒地域社会そのものの維持、人と人、人と自然のつながりの維持が難しくなっている。
- ◆「外国から食料を買えばいい」という政策が、世界一のフードマイレージ(9000億トン・キロメートル)に。  
⇒世界の食料危機と地球温暖化を加速している。

志民による具体的アクションプログラム

- ◆日本は、外国の農地を1245万ha(日本国内の農地は465万ha)借り入れ、全国の一般家庭での年間水使用量の約5・6倍に相当する627億立方mの水資源(バーチャルウォーター)を輸入していることと同じ。  
⇒外国頼みとせず、食料の国内供給力を向上させる。
- ◆農業は食料供給だけでなく、持続可能な資源循環の維持、自然生態系の維持、美しい景観、地域文化の継承、自然と共生する価値観の共有などの機能を果たしている。  
⇒志民と連携して国内農業を維持する仕組みを創設する。  
⇒消費者として日本の農業、食を買い支える  
⇒本物の味がわかる味覚教育、食品の値段の意味を知る教育を行う
- ◆自国優先の利害のぶつかるグローバル・サミットだけでは、世界の食料問題を解決できない。  
⇒志民それぞれが地域の資源をいかし、食と農林水産業のためにできることを実践し、うしなわれたつながりを取り戻すことで、持続可能な社会を構築する

とちろーカルサミット G8セッション

テーマ「持続可能な地域と教育」

●メンバー

・(M) 清水昭

株式会社ヘルスクリック 代表取締役

エミリオ森ロクリニック 院長

医学博士、脳神経外科専門医、産業医

日本体育協会公認スポーツドクター

JOC 強化スタッフ

<略歴>

- ◆1975年順天堂大学医学部卒業、同大脳神経外科学教室入局、ニューヨーク州立大学医学部講師、防衛医科大学校講師、同校医学研究科指導教官、自衛隊中央病院診療幹事  
国家公務員共済組合連合会 三宿病院総代、大宮医師会市民病院長、さいたま市小児救急医療センター院長を経て、2005年より「皆様に健やかで幸せな毎日をお暮らしいただきたいとの思い」から現職。

・(K) 宮澤保夫

星槎グループ会長

<略歴>

- ◆日本全国に保育園・幼稚園から大学まで様々な教育施設を展開する星槎グループ会長。
- ◆愛犬はロロちゃん、目に入れても痛くない存在
- ◆1949年生まれ(しし座O型)
- ◆1972年アパートの一室で生徒2人の学習塾を開いて以来、子どもたちのために必要な学びの場を作り続けてきた。今日では全国で9000名が学んでいる。現在も新しい教育を模索して、次々と新しい試みを行っている。
- ◆北海道芦別市に本校を置く通信制星槎国際高等学校は今年10周年を迎える。

・橘川幸夫

株式会社デジタルメディア研究所 所長

<略歴>

- ◆'50年東京生まれ。'72年、渋谷陽一らと音楽投稿雑誌「ロッキングオン」創刊。その後、様々なメディアを開発。
- ◆'96年(株)デジタルメディア研究所を創業。インターネット・メディア開発、企業コンサルティング等を行う。'06年文部科学省「新教育システム開発プログラム」に「ODECO」が採択され、

開発・運用。'07年「教育 CSR 会議」を立ち上げ、企業・社会と公立学校をつなぐための回路作りを推進。'08年「インターネット時代の新体詩運動」として「深呼吸する言葉ネットワーク」を推進。原稿執筆、講演など多数。

【最近の著書等】

◆『ドラマで泣いて、人生充実するのか、おまえ。』（'08/バジリコ）ほか共著、編著多数。

・篠崎資志

独立行政法人科学技術振興機構

社会技術研究開発センター企画運営室長

<略歴>

- ◆1986年科学技術庁入庁。以後、原子力、海洋、情報科学、先端医科学等の担当を経て、昨年11月より社会技術研究開発センター企画運営室長に就任。
- ◆2001年の省庁再編の際は、科技庁サイドより科学技術行政、学術行政の融和を図るための行政組織編成に取り組んだほか、2002年から2005年まで在ウィーン国際機関日本政府代表部にて核不拡散や原子力安全問題を担当。2005年に文部科学省生涯スポーツ課長としてスポーツ振興を通じた地域活性化、子どもの体力低下問題に取り組む。現在、JST社会技術研究開発センター企画運営室長として、「地域に根ざした脱温暖化・環境共生社会」「犯罪からの子どもの安全」領域など社会問題直結型の研究開発領域の企画運営を担当。

・関川三男

帯広畜産大学教授

帯広畜産大学地域共同研究センター長

<略歴>

- ◆昭和27年生まれ 東京都出身
- ◆平成4年4月 帯広畜産大学畜産学部助教授
- ◆平成8年3月 ニュージーランド MIRINZ・オーストラリア CSIRO
- ◆ 文部省在学研究員(平成8年4月まで)
- ◆平成15年8月 帯広畜産大学畜産学部教授
- ◆平成16年4月 帯広畜産大学大学院畜産衛生学専攻教授、専攻長
- ◆ (平成18年3月まで)
- ◆平成18年4月 帯広畜産大学大学地域共同研究センター長(併任)
- ◆座右の銘「程々の幸福」,「5快=快×(食+眠+便+笑+楽)」,「有言実行日々是発見」

・榎田竜路

音楽家 プロデューサー



NPO 法人横浜アートプロジェクト理事長  
北京電影学院ニューメディアアート科客員教授他

<略歴>

- ◆1964年5月18日生まれ。
- ◆法政大学経済学部経済学科卒業。
- ◆専門は内観的身体技法による身体運用及び文化芸術の研究。2008年4月にはボーカル・ギターを担当する3ピースユニット「真荷舟」より初アルバム「rainmaker」発売。また、子どもの感覚教育を目的とした NPO 法人「横浜アートプロジェクト」の理事長として、学生映画祭はじめ日中韓三国映像交流事業や、砂漠緑化プロジェクト、コンサート開催など展開中。

・合田倫佳

帯広商工会議所青年部  
帯広市 PTA 連合会 会長  
アサヒ電気(株) 専務取締役

<略歴>

- ◆昭和 35 年帯広市生まれ。北海道大大学院修士課程終了。
- ◆昭和 62 年(株)日立製作所入社以来、磁気記録媒体に関する技術開発、製品開発に従事。特にノートブックPC向け 2.5 インチ磁気ディスク装置では製品化プロジェクトから開発参加。数多くの製品群をOEMとして市場に出荷。平成 14 年に帯広市に戻り、父の経営するアサヒ電気(株)に入社。現在、専務取締役。
- ◆平成 17 年～18 年 帯広市PTA連合会副会長、平成 19 年 5 月より帯広市PTA連合会会長。現在に至る。
- ◆現在、
- ◆帯広市青少年センター運営協議会 委員
- ◆帯広市高校間口対策委員会 委員長
- ◆帯広市青少年問題協議会 委員
- ◆帯広市学校教育市民検討委員会 委員
- ◆とかちプラザ運営審議会 委員
- ◆帯広市総合計画策定審議会 委員
- ◆北海道PTA連合会理事 ほかを務める。

・松田美夜子

原子力委員会委員  
経産省認定消費生活アドバイザー

<略歴>

- ◆1963年、奈良女子大学卒業

- ◆「廃棄物処理法」、「容器包装リサイクル法」、「家電リサイクル法」、「自動車リサイクル法」等の制定に関わってきた。また、中央環境審議会委員として、地球温暖化問題、環境税などの審議にも参加し、講演、執筆、テレビ・ラジオのコメンテータなど、多方面で活躍。富士常葉大学環境防災学部教を経て 2007 年 1 月 1 日付で内閣府原子力委員会の常勤委員に就任。

<最近の著書>

- ◆「欧州レポート—原子力廃棄物を考える旅」(02 年、電気新聞)
- ◆「循環資源材料学」(04 年、山海堂)有岡正樹他と共著

・吉田博彦

NPO教育支援協会代表理事

NPO小学校英語指導者認定協議会専務理事

中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会総合的な学習専門部会委員

文部科学省学習意欲向上方策研究委員

(財)日本英語教育協会理事他

<略歴>

- ◆1952 年大阪府枚方市生まれ。
- ◆1971 年早稲田大学法学部卒業後、海外子女教育、インターネット教育事業などを行う民間教育会社経営にあたる。
- ◆1997 年「教育支援協会」の設立に参画し、99 年教育分野で最初の NPO として経済企画庁(当時)の認証を受け、全国組織の NPO の代表理事に就任。「放課後からの教育改革」を提唱し、文部科学省や教育委員会との協力によって、全国で社会教育活動をすすめ、さまざまな教育事業をおこし、地域教育力の再生に取り組んでいる。

【最近の著作等】

- ◆『地域の教育力はなぜ失われたのか』(月刊社会教育 2007 年)他

テーマ：「持続可能な地域と教育」

セッションキーワード

- ◆様々な悲惨な事件が生じているが、それはなぜなのか？学校の問題で済まされるものではない！  
⇒家庭、学校、会社の問題の連鎖、つまり社会全体で人を見守るシステムがないことが問題
- ◆個と公共と言う二分法の中にいる人間の心の不安定さ  
⇒地域社会の人間関係や家族の絆の重要性、人との関わり合いの醸成が大切
- ◆リアルとバーチャルの区別がつかない中でいのち・心の重要性の崩壊  
⇒自然や社会へのふれあいが不在、遊びの自己中心化等の問題、気づきのなさが原因

#### 志民による具体的アクションプログラム

- ◆家庭、地域の持つ基礎教育力と母親力の復活
- ◆家庭、地域こそ、人の生き方を伝える場であり、基礎教育の実践を教えること
- ◆祖父母から学ぶ非文字学問の大切さ、父母、隣人からの叱りを行い人との関わり合いを教える
- ◆自然体験等の体験学習教育の普及
- ◆親も一緒に学ぶ運動へ
- ◆人任せにせず、仲間とともに生きてゆく術を伝える
- ◆地域共同活動への積極的参画を
- ◆地域の自慢できる大学、組織を活用する
- ◆気づきを身につけ自然と他人に感謝する心を持つ
- ◆地域の誇りを知ること、皆で共有すること、子孫へ伝えること
- ◆志を同じくする人々が力を合わせて生きてゆく
- ◆映画塾を実践し広めてゆく
- ◆「とかちの・・・」のように東京は実践場所として活用する